

小松幸雄先生の古稀を祝して

小松幸雄先生には昨年10月めでたく古稀をお迎えになりました。先生にたいするわれわれ一同の敬慕と感謝の気持が結実して、ここに記念論文集刊行の運びとなったのであります。本号を先生の座右に捧げるにあたり、われわれはその内容が先生の古稀をお慶びするにふさわしいものであることを願うのみであります。

小松幸雄先生のご経歴と大学ならびに学界にたいするご貢献については、本号にそえられた柏 博教授の稿に詳しく紹介されております。駄辞を重ねることになりますが、先生について少しばかり述べさせていただきたいと思います。

先生は、真の学問は自らの血となり肉とならねばならぬということを信条として、生きてこられました。学問に隷従し、それにふりまわされて、右往左往することを戒められた先生から、真に知ることとはどういうことであるかをわれわれは教えられたのであります。眼前にくりひろげられる世俗的葛藤のまえに、学問や思想があえなく敗退するようのものであってはならないことを、先生はおそらく自らのご体験にてらして肝に銘じておられたのでありましょう。

学問や思想の下僕となりさがって自分を失うことの誤りを見抜き、また独善や狭量や閉鎖性を極度に排された先生は、親子ほども年齢に隔たりのあるわれわれを同学の友人として対等に扱ってくださいました。われわれは日常いろいろなかたちで先生の高潔なご人格にふれ、多くのことを学びとらせていただいたのであります。ほんとうの師弟関係というものが上下の関係ではなく、おそれを知らぬ率直さで自由に対話のできる人間と人間との関係であるとするならば、先生こそわれわれ一同の最大の師であったといっても決していいすぎではありません。

昭和26年、先生を経済学部にお迎えしたとき、先生のまえて時代は激しく変わりつつありました。新制大学の発足後まもない頃で、同志社大学もやがて膨脹期にさしかかろうとしておりました。昭和32年に経済学部長にご就任になりましたからは、先生は文字どおり公人として終始されることになり、大学や学部の難局に私をすてて立ち向かわれ、広い視野に立って多面的なご活躍をなさいました。経済学部が今日みるように充実した姿になりましたのは、ひとえに先生のご努力の賜であります。こうしたお仕事を通して先生がつねに公事を優先され、公平であられたことも、われわれに残された貴重な教訓であります。

いま、先生が経済学部を去られますことは愛惜の情禁じえないものがあります。教授会で先生の温顔に接しえぬさびしさはたとえようもありません。

幸い先生はすこぶるご健康で、壯者をしのぐ気力をもちつづけておられます。ここに経済学部教授の職を退かれる先生を学校法人同志社はなお必要とし、創立百周年記念事業事務局長をお願いすることになりました。この重責を担うにふさわしい方が先生を措いて他にないことは、衆目の一致するところであります。

しかし先生ご個人のことを考えますと、このお仕事が、文芸を愛好し、自然にしたしむ心の余裕をおもちの先生から悠々自適の日を奪い去るのは、まことに残念なことであります。お仕事もさることながら、先生に身命を惜しんでいただきたいと願わずにはおれません。これはわれわれ一同のいつわらざる気持であります。

先生が心待ちしていただける平穏な春の訪れが一日も早からんことを、心から祈念しております。

昭和49年3月

経済学部長 笹田友三郎